

冊數	番號	部門
三	一四	三
二	三	

近江輿地志略

二十一

日	モニ	モニ
月	モニ	モニ
年	モニ	モニ
時	モニ	モニ

江輿地志畧卷之九十九

腊所 寒川辰清輯

人物之上

彦座王 〔後海國の造ノリ〕國造を紀之シテ  
袁邪李王 〔萬葉乃列近後海の蚊蛭の別の裡ナリ〕  
瓦耳記 〔以望八面國也知邪〕乃比名ナス  
稻依別王

雅武王 〔舊事記曰日本武尊要兩道入姬皇女為  
妃生三男一女兒稻依別王大上君武部君等祖次

雅武王辺江達部君祖宮道君祖

一盤撞別命 舊事記垂仁天皇紀曰所生皇子十男

三女磐撞別命三尾君等祖云

一息長宿称 国化天皇の児彦座皇子命の児山代  
大箇城の真若王の児迦余米留王の児息長宿称  
息長宿称の女則神功皇后名からて息長ハ南國佐田  
郡の地名なり

一意富多年安氣 近傍海の安國造の祀と百年

記すくまノ安國といより野州移行なり

一川枯前 姓氏錄曰川枯首阿目加伎表命四世孫

阿目夷は比止命の後之ち舊事記曰彦湯支命族  
海川枯姫爲妻生一男

一谷上刀婢 旧事記曰天孫八世傳得玉亥命此命  
ハ清海國谷上刀婢爲妻生一男三女云

一大友皇子 人皇三十九代天智天皇の皇子なり  
天智天皇の御宇十五年大政臣小仕トク母宅子  
娘伊賀赤土申の乱不幸の一とつとも志賀の山  
上薨リテ事ハ日本紀曰くまノ皇子又多ヒホの子  
タヒトクマノ事ハ五言の詩と記す天智天皇崩御遺詔

タヒトクマノ事ハ日本紀曰くまノ皇子又多ヒホの子  
タヒトクマノ事ハ五言の詩と記す天智天皇崩御遺詔

國を統一すと早々に皇子を取て皇太子命に陞た  
うへて薨り、官行の諸事も大に多めとの様子と成  
る。詳くはよどみなく天皇と天孫と曰ひて大名を  
皇太子、臣属の三船の懷風簾御主申の礼天命達  
をと記し水戸君乃大日御史も大名と而記とて正  
徳も載る。水戸君乃武臣安藤並の御事御筆  
も天武帝天智帝の盟が背く。太白帝の天元と唐  
かととある。天祐と天祐は臣軍の浦を  
御紀本と仰ぐ。天祐と大名とは源氏と諸事と起せ  
ゆのハ公論、うなづけます大伴氏・伴氏・羽都氏の祖

大津皇子 天武天皇乃皇子の御子也。セ吉行  
とうくくは源氏奉公也。て諱す。後年

一 岩多王 お岩多麻呂と大友皇子の才ニ勇をも  
又の歎念とす。即皇子の御事と考へ。國  
城もと遠もと後道世入通も

一 僧海三船 三船も大友皇子の子孫。祀の高御王  
又其他高王の三船姓。藏總敏。て。やく群もと。は。更  
そ。ま。え。年。時。と。海。の。ま。く。場。の。場。日。年。記。無。

四年秋七月庚戌刑部卿後四年下革周幡也。海也。

人三船卒をくわし

都堵年麻呂 晴弓主のふを領つ郡司とももと長  
壽りんを又祖の医師と終て國御寺の壇越と  
原塚をと骨とし多忙と仰入寺のり教説もあくと曰く  
大師と仰くにの四至をさしけりて傳法と  
地とするくと年三百四十セドて終と云ひ言草  
有几第とし

唐麿麿名と村主都活年のふを領の郡司  
すくと壽のくと年一百十九歳と

清村 村主のふ大友をみの玄孫と初く難羅の社

國とくとみ源連竹とて職とくと

栗井王 大津皇子のふを

男主 大友主をみの曾孫とて都堵年麻呂のふく  
大伴男主と号し居くを欲と説きに和のそとを奪  
舍のを破り思之の本洋外志賀郡毛と社り  
室下、敢う

兼賢王 文徳天皇の後四ノ皇子惟喬親王のふく  
南國大食を差しゆづる小食王ともち或がた物高  
御神祐伯山城守等とゆるひと正四位上守

近江君雅守 日本紀仁德天皇の紀ハタケナニ

毛野臣 日本紀継體紀 新羅の接兵の大將アシテ  
功アシテ因太四年石子正と對馬シマもと夜々船を泊に

遙寄すアキラカス奉スル

教待和尚

良等山教待和尚ハ清水行處居士の號

有アリ三井別院記アシテナリ初天智天皇渴

後御稱アシテナム年數百年第ニ年之の新年と御

蟬丸 成都卿敦夷親王新色アシテ吾く喜びと

洋アシテ草庵アシテと吉也アシテ抑アシテ世へ育人アシテと

ちやうアシテはさひアシテよ志賀郡アシテおほの東下アシテ浦安アシテ

僧懷

三國傳紀曰中近江の不不位の義と仰

庄即ニ六時中四却下すてとつとひうれ玉金と

のあく名にくく翁云我久化アシテ翁アシテ一の便りアシテ

キテとす年一乞アシテ帆アシテとま鷹鳴の若と

引アシテすて傍アシテとす寒勢アシテつアシテ地獄アシテ苦と身と

せアシテとす猶止アシテ心と少アシテ妙アシテかと才唐アシテと

匂アシテときの玉雲アシテ手アシテとしと六曲アシテ風アシテうらに波

極樂海土の在巖アシテてのまく飲アシテてせ乃のゆと

多アシテとくアシテ

佐木成頼

宇多天皇の子源ノ朝良アシテ四代の原參

浅枝の次より毎々源も勘定無事に仕付程  
下り叙され成れり又枝差近は守り成れりと白国  
佐々木の家より一通の手書有り 佐々木氏也  
を仰ぐ武臣として國の事と稱す

秀義 佐々木成れ歎世の孫く秀義生きて十三歲  
高麗判友源秀義也くみよしに保安三年有秀義  
號く冠て秀義也く伊豆の力添とありく佐々木  
源と称せ保元年後とく功行せく源を五年  
乃ち十三歳とく強勇と称する也一そう)年清盛  
もとほりとて秀義篇とぞす年少ふる源秀義

お抱えゆきお抱え人間益をふそん(クニ)とは  
よこしてかどりてうらむひそ常く義清(ゆき)  
秀義近(アリ)玉(タマ)に寄(シテ)二千年源秀義  
君の名(タケル)伊豆の北(キタ)に徳(タカシ)て秀義高  
君の名(タケル)徳(タカシ)て秀義高君の名(タケル)徳(タカシ)  
臣の名(タケル)徳(タカシ)て秀義高君の名(タケル)徳(タカシ)君  
君の名(タケル)徳(タカシ)て秀義高君の名(タケル)徳(タカシ)君  
平(タケル)國(タカシ)出(シテ)てよし定(タマシ)の法國(タカシ)制(タマシ)と  
令(タマシ)く頼朝秀義とて健(タカシ)て近(タカシ)て接(タマシ)

田(タカシ)今年田(タカシ)經(タマシ)陽(タカシ)金(タカシ)の更大(タカシ)唯(タマシ)國(タカシ)と云(タマシ)

秀義と秀忠清とて、國中の多と合ひて、もよ地アシタカある  
平田の延暦被廢ハセテ、即ち、官人クニヒトの秀義も、  
士卒シナツみせそも、病アシタカ砂アシタカシと到アシタカる年、冬半級被廢ハセテ秀  
義を射アシタカシ中アシタカ秀義馬アシタカシ、即ち、死アシタカシ。

一 佐久本多惣アシタカシ、秀義アシタカシ、即ち、佐久本多流アシタカシを之  
え年四月アシタカシ、檢非違使アシタカシ正補アシタカシ、佐久本多立位アシタカシ叙アシタカシ、近江  
乃五左衛門アシタカシ、二年四月アシタカシ、夜行アシタカシ、北り、年アシタカシ而て是  
猶アシタカシの如アシタカシ、四の日アシタカシ、四方アシタカシ、四の日アシタカシ、之  
信アシタカシを、因縁アシタカシ、不アシタカシも、之アシタカシ惣アシタカシ、又アシタカシ之アシタカシ  
近アシタカシ、かく、事アシタカシ、お揃アシタカシて、富アシタカシい事アシタカシ、江戸アシタカシと、軍事アシタカシ、

國の下アシタカシ、を、山陰アシタカシ、山陽アシタカシ、を、かとアシタカシ、すとアシタカシ、治東アシタカシ  
奉アシタカシ朝山本の卿アシタカシ、平野アシタカシ、を、せらアシタカシ、奉アシタカシ、通アシタカシ、朝朝アシタカシ  
條アシタカシ政アシタカシを、て、室尾アシタカシ、と、來アシタカシ、と、和アシタカシ、と、室尾アシタカシ、と、攻アシタカシ  
魚隆アシタカシ、旅アシタカシ、尾アシタカシ、信遠アシタカシ、と、そとアシタカシ、勇士アシタカシ、あ、魚隆アシタカシ  
之アシタカシモノアシタカシ少アシタカシ、少アシタカシ、時アシタカシ政アシタカシ、是アシタカシ御アシタカシ、謂アシタカシて、曰アシタカシ吾アシタカシ魚隆アシタカシ、と、曰アシタカシ  
信遠アシタカシ、其アシタカシ生アシタカシ、本アシタカシ、魚隆アシタカシ、と、敵アシタカシ、與アシタカシ、信遠アシタカシ、と、以アシタカシ、之  
今アシタカシ聞アシタカシ、並アシタカシひ、聲アシタカシ、伊アシタカシ、ら、若アシタカシ往アシタカシ、信遠アシタカシ、と、信遠アシタカシ、と、以アシタカシ、之  
邊アシタカシの、呼アシタカシ政アシタカシ、と、臣アシタカシ、と、うちアシタカシ、伊アシタカシ、ら、若アシタカシ往アシタカシ、信遠アシタカシ、と、も、少アシタカシ、之アシタカシ、信遠アシタカシ  
毛アシタカシの、後アシタカシ、少アシタカシ、御アシタカシ、も、之アシタカシ、之アシタカシ、信遠アシタカシ  
假アシタカシ、と、號アシタカシ、之アシタカシ、是アシタカシ、度アシタカシ、と、之アシタカシ、之アシタカシ、信遠アシタカシ

三總と号す信遠と號すて義貞と重み地く時政の事  
清く優萬隆う無と多才で破り遂に萬隆と転て是者  
元年彰朝太庭墨玉輕く石橋ね山く篤ふ及び伏行  
秀義と常院が爲るは思ひ事もしてほと漏れを教  
至る所てきはと子年う（天下已み定）お駒足名  
を也に益封し也に乃世復うと之等の功行けくを  
傳う

一 佐木信綱

三總第四子う（正統）  
嫡もと號く）兼之元年北條泰時無と卒て有入  
信綱北條氏功ありと安貞元年九月廿日兼之の功と兼て  
傳う

南國豊浦和迩堅田をはく益封し栗原北郡の地び倣  
をすく天福二年正月九日豫倉許之徵と称一七月廿日  
娶生引る經佛と名ナセヨシ虚假佛と改シ嘉祐二  
年九月廿日徵を詠く仁治二年二月十九日嘉祐十二  
年佐木氏頼 佐木氏時信多ナリ母ト宮内左衛門大は時  
約く女嘉慶元年三月テ生は娶と別ニ其家ふとちづく  
應永三年六月モニ立と享年四十立延光元年足利氏  
新田義貞を既子て有入る義貞は破砲天皇と号す  
蘆山をサム氏頼奉勅と以て迎ひふるノ却事あまの  
城を據る義貞の勢功ノアハを贈る義貞故ある矣

至ニ及く保城守すも唐應元年北島顯家東奥の尊  
將として京を入ることひ足利氏の頼と偕して法將  
より顯家を辻に召喚し召す御子・昭子・し貞和四年  
楠正行兵を引け起て身代をもつて島山近習に石  
本義長とほり義長と將として義良伊勢と奉ひ石  
塔村房仁木義長と將として伊賀伊勢の名ニカニと  
名ニ近江高木山下に源氏氏新寺聖堂に入り佛を祀  
和尚と曰ふ。新寺は金剛寺威徳院是也

一 佐々木高賴 佐々木正統十八世子 佐々木頼家子也

古廟四郎と号ひ大膳家・住・後醍醐と別か山橋と書  
永正十七年八月廿一日卒ひ應仁元年細川勝元山名屋  
堂とよち後をあつじ東西を渡日夜文政と佐々木氏  
六角ハ山名子属・京極ハ細川・庵・長享元年九月  
將軍義高高行と立て事と衛らと云ふと民窮  
ト先濟すとほり義高怒く自斧と將と  
近江をもと高賴城を出・甲賀山中に入りを了教也  
さる年とあひて高賴城を出・甲賀山中に入りを了教也  
自後平義極と號として多く其事の尊をた  
五萬石不甲賀山中に入りを了教也

佐々木定之頼、佐々木高家、弘安ノ永正八年強正其彌  
ニ往キ北陸道乃後若狭より後讐と判リ、高尾、古  
木、江戸等と号シ、天文二十一年二月方平至る年半  
父定頼サ一ノ頼高と云ひ、高尾と云ふ者是れと以  
嗣とせし、放ソ定頼後之年十九歳、一ノ變  
を制リ、僧ニシテ、お國寺の靈廟院、居留アリ、龜井  
有ヒヨウハ六角家乃長臣高頼者セミ也、子氏範定の  
孫也、事はさうといわば軍義相ともく龜井者と  
して、雙子モ一高頼、一代ノ國寺主アリ、し龜井者  
柳と行て、剣と一麦萬石と偏く馬とハ捧モ乃事也。

敏と府中の土皆笑ひて、將軍名と宝頼と、彈正歩  
彌三佐、三好細川等と號す。切ら、大永元年夏、極  
後悔、お隨の細川高國、若將軍義隆、乃と義晴と  
京めを出るとき、三好朝庭へとあがむと、義晴、唐紙  
を解く。因に御内侍、そくみを制す。打くさり、相の  
あとは、号猿乃経文とする。本と洋と天文十五年  
青十九日將軍義晴世と義輝の為め冠禮と仰之と  
ほり、京府無塵の中、うそとほり、近江より、日吉の  
祠官樹下氏、アツシ、於く冠礼の本と被行を定め  
加冠す。二好長慶、義晴と並んで今冠して、義隆

城を出でて邊にあがけり。義賢ももとと率以て佐々義  
晴道と宮と處山川下みね。うれしかつて之教義賢  
日夜環衛す。奉一毫潔り。

一 佐々木義賢。右馬曾左左守。佐佐木嫡家二十世。  
定教り。將軍義輝譯乃一字を少。義賢也。也。也。  
承暦元年四月八日。繫を判。義禰とちづく。括岡所と  
号。又梅院。度長三年三月十四日卒。福八年五月  
九日。之母義能。杉承久。道將軍義輝と義と義昭時  
傍りたる。南都。一葉院。五色く。多き。之義能。共  
を。之。相。て。ひまよろむ。行。て。春日山と歸つて。

近江。もと。義賢。佐佐木。也。之。義治。も。も。て  
之。一。隻。も。も。て。義昭。云。近。に。之。ち。の。城。と。討  
社稷を。直。後。也。と。教。て。竹内。鐵田。信長。已。分。義。竟。無  
を。裏。一。岐阜。の。ゆ。雄。據。一。佐。々。木。也。と。滅。て。邊。に。せ  
ら。と。教。一。互。石。と。之。も。少。い。義。昭。父。賢。を。う。た。し  
十。年。八。月。鶴。翁。水。寺。朝。倉。義。景。也。佐。信。長。也。一  
義。賢。自。大。軍。を。督。一。個。し。人。と。之。龜。と。ほ。く。了  
砂。石。と。壁。一。虛。河。の。上。流。と。壁。一。つ。信。長。軍。を

川。一。本。弓。ア。附。壁。龜。と。之。水。大。か。う。信。長。

軍大より私きる郡多ふ勢多く破す。信長狼狽。一  
終より勢とほくをもつて。九月信長復志としき。山に立  
入義賢囲壁を和田山に築く。信長地利と極めて險  
易遠近を審み。自將として和田山と攻め。若狭衆  
を以ても角す。自將号を以て。和田山と立す。箕  
作乃山と攻し。山の守將吉田建邦也と以て降す。  
義賢又おれ方主の所ともかく。信長と獨りて利潤を  
置く。おれちゆく歸ん。とさうて内應の人々と謀す。  
綱つぬ已。徳く。義賢は。おれ所。防護を乞ふ。甲賀山  
入。元龜元年四月信長越前をめぐる。朝倉義景と  
共。

己未庚辰。信長。おれそまほを絶ゆ。信長。おれを  
失く。國道。義濃。山。河。千草山。七瀬。す。而  
氏賢。松谷。善住。房。と。て。移砲。と。て。信長。と。相  
ひ。や。ろく。移砲。と。ね。中。六。月。四。義賢。又。子。師。別  
川。上。く。陣。し。信長。は。築。本。田。勝。が。も。と。破。く。る。と。奴  
。甲賀。ア。高。セ。石。人。義。多。い。九。月。信。毛。之。好。の。事。と。け  
た。故。而。御。寺。の。主。傍。光。亮。無。を。起。て。と。好。お。應。ハ。信。長  
え。れ。と。弱。す。と。あ。底。と。無。と。り。と。歸。と。好。お。應。ハ。信。長  
共。近。と。て。落。を。歸。し。石。佛。と。か。朝。倉。信。井。を。立。す。

伊あかせ一はくうなじし義賢又よ山の軍と  
合ふ勢多移とちりは長程ひと絶は信長和麻以  
て年八月住長豐工ノ原ひく上處山と改し義賢、山名と  
すよりかはる石部と今

一 佐々木義治 佐々木嫡流二十一世子と曰ひ名ハ義弼  
右衛門督將軍義輝諱の一子と仰。治繁と號り玄  
雄と名づく所居と申すが是を多忙と云ふ。十七年  
十月三日卒。享年三十有八。治繁。年十二月十八日。又義  
賢。國と義治。ふはく。義治又とたよ。石部。大安  
ヨリ。給はの城。了。治。多。を。申。て。信。長。と。書。し。野。

一 佐々木義昭と京みゆ。義豊と號。減。政  
とは。義。一。松。月。の。う。。。無。勢。大。玉。揚。一。九。四。國。  
徳。が。と。な。く。。。善。政。と。称。民。の。德。化。と。あ。る。  
一 草野庄司定康。其生自洋。かく。浅。开。經。の人  
左。首。に。。源。氏。通。の。走。ゆ。か。も。そ。く。年。は。乃  
札。不。お。勅。と。か。く。忠。わ。る。奉。教。く。東。關。の。太。亨  
の。知。起。み。り。く。

一 浅井亮政。始。の。名。を。新。之。部。後。佐。あ。ら。と。号。い  
三條大納言公綱。立代の孫。而。又。を。創。る。即。豊。國。と。よ  
すて。三。條。大。納。言。公。綱。立。代。の。孫。而。又。を。創。る。即。豊。國。と。よ

三年荀國浅井經三野村と征源をもどるをとて  
氏政と号す新左衛主政と產はる名龜君京極  
持清は是浅井家の元祖也。主政新三郎四郎と  
生じ豊政高政を生す。亮政重松とゆひ。久松と集  
め。まつ下野ちく政子の子にて多セリ。鶴山の孫  
と云。し義治。まつゆり行く。源と云。もと  
近江の化多く信長少属は義治丈と作。源と伊  
賀伊勢の源と。かくて豊臣氏天下と云つて。色く  
圓白秀次を以てと。令と。右を。後。良秀吉秀彩と。歷事。山  
傳秀次害を遇す。後秀吉秀彩と。歴事。

至後多處に處在す。がて。屬あく。され  
一 佐々木京極氏信 佐々木源三秀義子近江判官  
定綱とも其子近江守。信徳。の信長の四男。け。信  
を。京極ノ祖。

一 多賀豊後ち高忠 始多賀新藏人昌と。豊高忠  
。ひ。し。佐々木京極。高忠の二男。と。多那の源。昌代と。勤  
伍。京極。昌代。も。の。浅井。と。代。と。と。浅井。却。や。谷。山。不  
在。か。と。武勇。公。織田信長。兵。主。事。と。久政  
昌政と。攻。多。一。浅井。の。一。勝。と。

一 浅井長政 亮政。孫久政。子也。傳。主政。と。多。下。よ

又名天正元年九月朔日薨至寔永九年九月十五日後

二佐中納言を號り於上養源院天英宗清居士と号ひ

一 欽良辨 姓八百瀬氏志賀郡人也者一百歲の木邦  
あるゆき百瀬氏うる良辨もす後裔うる母桑とす  
親者の傳あつてくちと生うる二母のうち母桑とす  
兎と樹鶯め多く大鶯と云ふと號でさる母桑とす  
南京乃義園春日ノ祠及詔文鶯鳥の小団とすらしく  
アラ鶯と日本を主とすと云ふと號でさる奥  
寺ニ及ハヌ足ニテ始くと云ふはき経文花巻の奥  
角と之良辨ハ石山寺及び金鷹寺と奉歸り

一 欽最澄 傳教大师是也姓乞三律氏志賀郡人之  
父と百枝と了神護高安元年八月十八日生焉延喜二  
十三年詔を以て度入々台山國清寺と號く是故  
は師一心三觀ノ方と號けんあら庵ち御湯座とく  
主と不敵外化身寺頭塔院等とく度の貞元二十一年  
九月大使高麗賀使とて帰朝を期しノ字ト以矣  
乃始號三百二十年多那帝大かさひ眞言權勢と候  
セし毛木朝客満川をうり

一 善積藏人原忠隆

信和源氏之孫王經墨の號也

經基主のふと滿政と云はば忠隆の父もいは忠  
隆也はの善勝氏の祖と滿仲の父も

一 斎頼

左衛門尉

に仕し善積忠隆の父と席牛元年

源頼義朝臣鎮守府の將軍となりて陸奥の下向  
乃より記斎頼也姓守に仕し唐阿も今唐阿も

源氏流と云ひ人の傳あり斎頼歿年列復

之念降とはまくア不圖即ち少しくおきに  
雲在乃喰アリ一音一庵多喜本思ひやく念降

をねけら外のとも除雲在と縛りとぞくと  
之も虚談なりてかげんに庵と呼アリ本と

世乃人移アリ本とがくの如一近世官印の武用矣畧  
唐崎大納言政頼と記アリとのハ誤なり

一 唐崎大納言ハ村上源氏久我内府雅道の子通資子  
ナリ斎教と云ふ出向ノシナリ斎教の墓多摩郡  
長引寺前也すと云農田乃至神津神平貞山と  
塔と一處方の故夫強しげ傳役りかるかく斎  
教院、称佛ト同一

一 山本冠者義經

少佐を近江源氏と云新羅三郎

義光のふと義業と云義業のふと右近侍義定と云  
義定の義定と義經のふと義浦義明と云二男と帰

鐵義弘とひ義經才を柏木義兼と云ふと柏木  
判官義兼と云ふされ高國乃地名なり。又義朝の子  
義經とし。鐵義弘と。猿眼なと。九郎と。義  
兼と。猿眼。山本九郎。義經。三河小源氏。九郎  
義經と。二ノ子と。三ノ子と。理あり。

歲田親実 薩生郡津田人。權實之弟。津田乃先生之子。名尊成。即歲田氏之祖。桓武天皇十四世。孫。其家記曰。安德天皇。永二年秋八月少松三佐賀盛西海。あくの日。そつと安殿。日本を嘉近。仁の國津田。アリ。傍男。アリ。生じ。毛親。

高きより越前國鐵田卯神の祠官朝美と名ひては  
鐵田氏より出立るゝ鐵田氏と移り鐵田信長と朝美  
十四世の孫と今鐵田姓乃庶流傳田氏といふ移り之を  
タチハシヒトハシ

至極氏信 在舊門附新造近山草堂不復更荆蔓一通  
書於至極氏 丙午年正月十九日年七十有半清江  
清境亭之主南園因移入此處身已老矣至極家以

菩提子

至極高氏也乃遂射刺殺之道參也是刺  
高氏一派の後迫歸もと封めぐら了一國こく乞う屬しゆ汝

一 佐多木秀綱

由はる文和二年六月丁未白山祭

山徒と我の忠烈と京極高氏子なり

一 佐多木秀詮

右近射鹿安二年八月丁未南房の宣

軍と一ノ浦郡合戦とちかく秀綱、秀

京極高次

左近とちかく高石みより左近家相

と島に西國大津の城

一 佐多木次郎經弓

中勢五法名經蓮仍く木源と秀義

源男と源賴朝と仕軍切限アリ、承元三年六月

經蓮院中三侵一合戦アリ、詳計乞うて左近放走の後

鷹尾川傍に落れ居キ、内侍家と侵者と

御命とすり風子、園東家免とてかく仁宗經蓮  
自彰と劫めぐらしとむらめぐらし自彰と

一 佐多木加地高盛

右近射猪名而合戦仍く左近

秀義、三男也、松山城の合戦四十九魁、仁宗元年

七月廿六歳、父乃命、こうして伊豆乃命とあてて右朝

と仕え、宣慶殿御骨とぞもとえ附秀義と仁安

秀義、十月十九の夜、賴朝乃弟、あゆみと首脳を差寄

慶也加在と名と慶綱、うそとじ活渠四年八月

宋判官萬隆説置の内足守人奈向人慶湯ノ村

朝乃傳とて引立てり、寺念とて聞く方を萬隆

ノ彼雄確坐する方扇をもててすりとくか筆意  
ト与ふ池匂いほどの氣はをぢともあはねばうるの  
後毛櫻名に盛龜三と申入日月すら石橋山  
乃合我足手名取をつく「一合房義」してろねと延  
たゞうちへとて脇見とて差戸の上陣しよのう節  
盛龜(アリ)

一 仍木野木四郎高龜

左衛門針源と秀義四男也  
松山令役七度と津之彦年中木曾義仲<sup>元平家近</sup>  
討軍切牧奉と廻るひ御下里宿川乃之原今りと  
頼朝<sup>シケツ</sup>すすむと名馬を仍木尾鷲<sup>スル</sup>錦<sup>ハタ</sup>。

一 佐助

出附の本、佐助五歳<sup>ニ</sup>因防因陽伯耆口向<sup>ミカク</sup>と

一 能子 本朝列女傳曰<sup>ル</sup>内史能子者近江高麗郡  
乃姫姉<sup>ク</sup>貞觀十三年秋八月叙位二階免内裡表其

門間云

一 清常刀自

同曰<sup>ル</sup>拂村主清常刀自共近江国波井郡

の白姫姉<sup>ク</sup>貞觀十六年秋八月叙位二階免同戸

裸表門間云

一 外他信儀守

秀吉縁内良重と云浦生がの辯

一 石塔を文慶秀 潤生那部昌平の竹もすり 小倉源氏村  
田四郎春杞乃みなり

一 拍丹後守之秀 潤生那部拍子者乃多子と云佐多  
六角家の拵候鐵うり

一 松谷善住房 甲賀五十石の内ニ女とほく佐多木  
義賢乃妻とひ鶴と命と云う劍は彼ノ子と云はれ  
テ松谷主二乃忠もと傳す、成能ちの墨井ニシテモ  
信長と犯ても謀らばと仰ぐ所と一千草薙之待  
活砲を以てうちあやちと云ふ、信長の被ふ中善住房  
銃砲ノ名人ナリと云ふがくの如く櫻連の如くナリ

一 大隊圓房 潤生那部太陽の土六角家のゆじう應に  
記出アリ太陽十日東方天文の土六角家の直也アリ  
太陽ゆき回又市住也アリは(右竹平とて多也)と  
極山を歸る 潤生那部太角家の度生六角家者頗應  
仁ノ役所のほ多功ウア教へ記りテ左多也達秀  
潤生也とは(左多也)も勇猛ノ士と聞ケルの役  
鐵田の内もと船もどり

一本村戸衛門射行足 徒伍伍下に伊六瀬生那部本村江左

住ひ佐多不經方ニ男也男多詫お物足道五續

トシカタトミ家佐多の神在職と是道小譜

足道子大官司役立佐下道政天下平家ノ掌事

行つて仍あと移り源家ノ氏族移り奉らる

木村氏ノ祖行是母も紀下野守盛宗の女也と以

祖母ノ姓を承り木村接从紀の道政ノ上平家ノ

端祖支事永江テ源家ノ属一西國付より人移

りて道成とあらそりし木村源立重章同源と成

總同三弟後繼皆け木村ノ族也源家一統ノ後成

細ハ刑部丞信綱も后也更<sup>アリ</sup>仍木の近江を

竹子

一 武藤豊助家明

蒲生郡布子のたの彦子ノ家明

予と号す家豊信也代りけん乃江口<sup>アシコト</sup>と云角

家者也失傳也方義昭義和即勳座のと云考

多と云<sup>アリ</sup>豊信也佐多木義治寵臣にて治のやうと

號を治多と云はれまし信邑の角也と云<sup>アリ</sup>義和失

少<sup>アリ</sup>今<sup>アリ</sup>豊助也祖清和源氏岩松也時

萬平之代の治亂<sup>アリ</sup>

一 河井元馬元庸明

蒲生郡河井の豪士也角也乃

者也<sup>アリ</sup>原羽<sup>アリ</sup>之と七郎左衛門<sup>アリ</sup>應仁の乱賀

山の戦功載く記す也。唐明ノ子と新左馬ニ男  
三名トシム氏郷(伊)、唐明弟ニ名トはる馬(ア  
甲賀ヲカ直臣)して忠義と仰し、之方よりて世人  
の恵(アリ)。新村左馬村多(ア)河井左馬(ア)唐明宗  
新宿郎祐安(ミ)上柄(ア)利(ア)範(ア)江(ア)又(ア)大倉(ア)喜(ア)  
東(ア)治(ア)地(ア)向(ア)新(ア)部(ア)豊(ア)雄(ア)七人也。

一  
吉田豊年(ア)雄(ア)蒲生郊吉田(ア)左士(ア)角(ア)家(ア)  
者領(ア)大(ア)左(ア)郡(ア)平(ア)因(ア)倉(ア)致(ア)ヒシキ(ア)の(ア)活(ア)の(ア)  
礪(ア)雲(ア)房(ア)角(ア)大(ア)軍(ア)勝(ア)勝(ア)ト(ア)ノ(ア)蒲生(ア)新(ア)  
モ(ア)シ(ア)鷹(ア)空(ア)國(ア)收(ア)ラ(ア)主(ア)五(ア)萬(ア)千(ア)云

一  
若使守定元(ア)雲(ア)を(ア)之(ア)を(ア)され(ア)ヒ(ア)武(ア)功(ア)イ  
一  
布施下野守(ア)蒲生郊布施村(ア)主(ア)士(ア)角(ア)家(ア)  
者(ア)ヒ(ア)布施下野(ア)都(ア)知(ア)向(ア)利(ア)而(ア)同(ア)ら(ア)に(ア)内  
新(ア)九(ア)郎(ア)賢(ア)友(ア)俄(ア)升(ア)ニ(ア)カ(ア)ト(ア)布施(ア)山(ア)めて(ア)最(ア)外(ア)復  
新(ア)藏(ア)人(ア)賢(ア)友(ア)降(ア)事(ア)仇(ア)木(ア)仕(ア)

一  
宇(ア)經(ア)人(ア)蒲生郊宇(ア)川(ア)智(ア)仁(ア)勇(ア)つ(ア)ヒ  
火(ア)伍(ア)木(ア)角(ア)の(ア)近(ア)臣(ア)義(ア)濃(ア)チ(ア)折(ア)誓(ア)は(ア)即(ア)  
達(ア)計(ア)ハ(ア)ル(ア)不(ア)易(ア)ス(ア)計(ア)多(ア)足(ア)是(ア)を(ア)持(ア)持(ア)れ(ア)よ

一  
倉橋郡石京進政廬(ア)蒲生郊倉橋村(ア)庄(ア)工(ア)佐(ア)

木(ア)角(ア)の(ア)者(ア)領(ア)

一 鏡主重 仍多木貞忠の二男・徳氏の元祖と  
て多久紀代・仍多木家の始祖として里生彦、生勝  
と清勝を守ち紀多多摩川水原一堂浅井と  
力のさある紀义と忠功り

一 馬園廣定

蒲生郡馬園の主・仍多木氏信、勇

ナリ代々仇、本多・四天王とよほす・馬園  
をはじめ実恕・圓源・左衛門房・同源・右衛門  
・實賢・内丹後守・實冬・仍多・仍多木家の近習者

一 上田次郎秀政

蒲生郡上田の主・秀吉・木村道政

三男・秀利・秀政の子・花通・秀の孫・正天文

以上田氏が正之と名づけられ

一 金内河内・玄綱

蒲生郡金内の主・秀政の子・正之  
・正利・正信・正昌・正和・正義・正義・正和  
・正信・正之の記あり)

一 九里・高野・高雄

蒲生郡九里村の主・秀

九里・高野・高雄の子・秀政の子・正之  
・正信・正昌・正和・正義・正義・正和  
・正信・正之の記あり)

物を生れ、又おひりて旗本をもあくら九堂  
徳秀記録より

一 酒庄佐はる村浦より蒲原郡酒庄村の主を村浦  
秀と源氏の男浦と云代に佐多木の者ひつみ  
賴師政承國傳尼く自害の時忠久に佐渡  
足浦入道・豊浦又ふとく甲賀守信と忠久  
とつゝく

大町久留米祐綱

蒲生久留大町の主を佐多木

近臣

一 浅井次郎盛家

日野博少尹の主を佐多木豊浦

一 冠者行義・みちの角・清波清之助・代主行  
一 他田範後守・賴智・蒲生邦・他田の主を村智・  
次郎・忠多・秀・経・忠・高・景・准・代・佐多木・源  
七郎・村の内・秀・高・忠・經・高・景・准・代・佐多木・  
秀・高・忠・經・高・忠・經・高・忠・經・高・忠・經・  
木・庄・忠・高・忠・高・忠・經・高・忠・經・高・忠・  
足・利・高・忠・經・高・忠・經・高・忠・經・高・忠・  
乃・行・高・忠・經・高・忠・經・高・忠・經・高・忠・  
秀・高・忠・經・高・忠・經・高・忠・經・高・忠・  
往・高・忠・經・高・忠・經・高・忠・經・高・忠・經

正則家と申す。まことに五年は早の城、功行ア福傳

也。山雲尼がふり武臣本庄越中アノ利川族

もアシテ

田付吉原助景澄

又を義作ア主之ノ神傳却

田付村の人あり、神絶ア達人アリ、多怪ニキテ原助

京治ニシテ四部の多房方を御前ナリ、五源を清モ

是を内分院の神絶ア子の最妙する者ノ吉七舟モ

家中集ニ總集町日集易シ集等アリ

梅田左近酒忠

甲賀の人ノ事に、主小左近忠

本山ト檜原ト安仁ト鍛錬ト木川友之助正信ア室

正信ア櫻原俊重の門人アリ、世是ア櫻原院アシ

志村加古房資良

神俊新村のゆき新村那須守

資則（あつぢ）父ア子ア仍多手免臂ア臣アリ、承錄

二年正月の後、独身ア武勇ア勵ミ新村のゆき新村那須守

三年正月、元永二年八月鐵田信長松久の弟アリ

政綱ア又アトシ及多喜福氣清多喜也ア百石平野（野見

もアシテ）海と以て遊客（うき）中村武助ガ島一氏

属ア

東照神社少司一

新村とも村方（しむら）し木村（きむら）ノ郡（ぐん）

書く所無く忠貞と云ふ者をも今も忠貞記の説に  
傳す。

一 德永石田守 神秀公の子秀出生自ハ伊徳の阿庭氏  
伊庭氏の武臣たり後佐多木少輔の直系ももう娘子  
紫田信豊より徳永一信豊も宇摩秀吉より生れ或教  
多摩下野田と号すを美濃高野守の陽正とあり  
丹方石と称す嫡子尼馬多木つゝ也の事也子孫傳承  
あリ

一 德因親王の貞俊 神秀公の子秀出生伊庭の氏  
族ニシテも志士の信濃源氏也源氏義公の子井上

村秀の子虎井上滿良の漫胤徳因九郎右衛門子より  
せりて亦徳因氏と称し是徳因氏の元祖也貞  
俊文武の名うつて和歌の道と好んで山口四山云  
方義隆仍木家と稱して近習として天文の初房で  
弘慶とよばる源義慶の子貞隆は入倉と  
徳因大炊父 神秀公の徳因の先祖貞俊、一族の隆多と  
いふ伊達輝宗の子輝宗が正室の内と號して上松  
吉賀の家臣と云ふ。

一 和田猪次而與遠

清和源氏滿良の漫胤大倉惟土

景直六方河内守即四代の庶流なり是けに和田氏の  
之祖

一 種村大藏主道旅 神原政種村の子也近承政  
村の三男と種村伊至のち成し工をうす伊至も盛  
きの伊至も安らぎる所也は高木と云ふ高生  
翁は武功ノ佐加ノ事部四郎もと書面  
筋多一作主方ヲとひテノ法利傳もと松陽もと  
浅井也改招く字紀也うくあらり

一 河曲壹波守 神崎郡河曲村の主也小倉源氏の庶  
流河曲立高貞忠もと源也始り又市郎もと徳宗

一 五の武臣近江國三人の御弟也天文九年有官首  
青蓮院即ち主也年少と傳文也三人御弟也  
以井建郎は河曲也

一 佐藤但馬守貞豊 重臣也佐藤但馬守生山在城也妻佐  
藤久保家也野殿勇武の臣也永禄二年守護を有佐  
藤義弼建部系也河曲大藏主兩士命一祐と号  
祐さうを御て佐藤家也の経紀也とよどり也貞豊  
次男もと守節也貞豊も守則也御家事の協攻焉  
以降信昌も守則也也智之秀才學力也明智滅亡後  
蒲生もと守則也勢相争ひて頼朝將軍を尊嫡男

之等の事は寺内と云ふ鄉士は二男令義が後

活取寫りとす

葛尾範隆子　後妻氏、嘉永元年始う學業を修む

武功の士に活取寫り範の後徳承法仰は

建部傳内賢義

被居近連家の大守と和田山方

陽主連家源公彦昌昌明之男也。佐多守兼祐賢の一字  
秀と云。所謂近江二被革の活一今傳内流也。六  
賢文、筆跡と云々。傳内筆跡あり。在訓  
往來字行あり。

志賀与連家

被居近連家の彦守と豊臣秀吉に

仕へ。武功を名と稱し伊豆蘿山の城、近部助三郎  
ともふ古今之類の功あり。蘿山彦城も全く其勢  
勢を失ひて、力なく

香津畠助の死門

神傳幼秀傳細の彦守と信長

少功あり

一 善也。既而後之日，以名也。而名也。始之也。  
一 改之也。士之以是名也。故之也。是也。也。也。  
一 是也。後也。也。也。也。也。也。也。也。也。  
一 也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。  
一 也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。  
一 也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。  
一 也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。

輿地志畧卷之九十九終

近江輿地志畧卷之九十六

人物之下

一 大膳彈正 平姓駒井氏大膳正也。故小太伴  
一 在上引て氏移。彈正之子傳九郎。傳十郎。とも武  
功有裁て祀有

一 柏原源家高永 柏原家の人。は。一也。源賴朝。高  
一 永子細。也。勤。也。也。也。也。也。也。也。也。也。

一 柏原家忠也。附忠康。其出自詳。ら。け。也。源賴朝。高  
一 永。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。

後より化ちる資を多き者あり武田の主天文年中高橋  
郡守備吉は浦に立ち候を謂ふ時たゞその領下相  
原守之郎為永であ治承四年修造と考をうり六  
角家も勤む。トリと資を多き時より施し極も萬九信  
長小仕へ東山能率とも多く我記及相原産業の立草  
木はと早忠乃り

一  
遠友事略 基出首詳らうせば近の駿河門せられ  
産子後井昌政小仕へ忠原をほときも西野一の士なり  
帰川合戦小き武勇にて一信義と殺み殺にてと  
自言ひ歎泣も無く入をも小信長小生ほり。行牛

久絶春色を不知押瀬て徂すも未だ春色未だ  
越后大支良賀 也而朝相の村の度士も智郎小秀次  
奥三郎義豊のあね

一  
門根守在事 烏郡門根の產子後井家より有  
天正元年少奪義がれに大主大和守山縣出子と共小  
代化役

一  
百々空実

也の御而の度士空実子義赤守

信長小仕岐阜中納言義政も事仕又

上板原守景重

式ハ云京室その大入り相原守

ニ京守上り京時二萬石平津多もあらふ事ある事生

平定高景信とよ景信歿辺を地をりてトよりて上役と  
馬渡主事孫平至美齊と事家と云諱金植幕東政より  
事家と云平田代とふ事家と云別事家はうえしも  
至近席と云後後御前席と云東極高洁の陳代とと  
五年修と本多松鳴家の武をほむ也文嘉永正のより  
事家後列雙一と奉貞計と云後承正十四年二月九  
日平渡京ノ多ロ十三

新庄駿河守基昭坂田郡鶴庭の彦子鶴庭姓守  
又サリ

大名居守徳四郎

も首詳とけと云傳と本道太お爲

柳澤左神崎梅單と武功夷一裁てち平記ニ而利  
石田長樂菴坂田郡石田村の彦士鶴井家のも輩  
一代之能ものいふれり  
一  
陵見翁馬守俊恭鶴井郡尾山・其城支於野の主臣  
小波見翁と仰実高と云ふのり・此実高の子孫なり常  
而政と改変合我支高名威切向けて教ありて後和て  
うち弓絃射箭爲小隱居々息耕と云・鶴井没落せ後列  
發一と道西と云榮田梅家と爲ひその子大京久陵  
翁鳥弓と云殿澤山蘇の故也店没落せ後詳ナシ

一 安昌守河内守務元 代、高麗家の族庶也承正又

中湯鬼と傳ふ山本山小指範清井と稱ふ後和支河内守

宇二郎右衛門世後家歟と云押川大没切う信長のため  
小摺トモアラ信長より一て旨とせんと云もあつさく後美  
名金石の如一信長より一て小東ゆきと云も廣文寺山  
故に房我に城主の因達也海軍及三浦左馬少佐す  
も小舟販て後家臣高木社へと序の城山より石の城へ  
搬け骨也てうちそんとソクハあの笑被せり

一 井口官因支陣義氏 出自洋久也之義氏後洋正  
之子は井口義高モリタケ也城山の城主也危政少佐

て義光支忠義ヨシマサ也

一 船坂甚内 沖井郡船坂村の庄士船坂甚内左馬安喜  
子ちく後を嗣て平越の甚内人有利 船坂ボウサク也之妻  
船坂の成吉ヨシキ也或云外也安昌之有利

一 山田大炊父 子田次官爲生タニシカミ也大炊今事屋高  
次子鷹一 大津郡大津のとき其武功至高タケヒコノタケヒ也高貴大炊父  
至多業於牛と改名し

一 謝良源 無事子仰ヨウサク也清井郡河内村姓今  
姓川井源也母の物氏十有一と云ひ山下のり理仙生所と  
一年康保三年八月天台座主神已も山勢坐叔を

この元年天元四年大僧正とちる法勢を乘り東紀  
年正月音木平一久工信田吉惠大師と猪良土保元二天師  
坐つて承観三年正月小室院至りて坐り度源鏡と  
自分我於生身ノ如儻也而も妙曲妙魅乞祥と誓ふ  
と赤國等傍侍、是へたゞ先、足利義大師の像坐之  
きて門戸小室院

一 痛生氏師 田原道立高師後乳瀬生實<sup>シタマ</sup>家  
才子初の名ハ高千代中山忠常と号す後應徳とせ  
。若き時武富の名を冠し鐵田信良、後<sup>ハ</sup>豊臣秀  
吉仕へ故我功烈<sup>ハ</sup>信長母子<sup>ハ</sup>出で小室院後更

列會屋と號す越後戸の征我よとも木の名と號す  
會津有馬の名<sup>アマ</sup>也

一 甲斐豊後守宗廣 萩國か上郡 甲良の在の產士姓  
利祐<sup>ヨシヒコ</sup>も枝美十六代の末甲良三郎左衛<sup>ミツラ</sup>光廣時<sup>ヒタチ</sup>京師  
小室<sup>コウモリ</sup>にて達仁守<sup>タケル</sup>門林の通弟<sup>トド</sup>と其側生兒を邊山  
もの<sup>アマツマツリ</sup>也<sup>アマツマツリ</sup>甲良此<sup>アマツマツリ</sup>達仁守流の通の祖<sup>ハ</sup>光廣  
之<sup>ハ</sup>六代の末豊後守宗廣<sup>ムロヒサク</sup>の業<sup>ハ</sup>精<sup>ハ</sup>至<sup>ハ</sup>今<sup>ハ</sup>ヒトと  
彦長年中 東照宮宮家宗廣<sup>ムロヒサク</sup>を以て東武<sup>トウブ</sup>通の種栗  
ト<sup>ハ</sup>アキモト<sup>ハ</sup>宮家の年 宗廣死<sup>ハ</sup>了<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>後<sup>ハ</sup>年

平<sup>ハ</sup>アキモト<sup>ハ</sup>幕下小利

一 待罪山樂 莆生郎の入也あ氏本村名ハ光禪の

宗ハ平ニ佐シモ氏の修齋ナリ其祖を善通シヒ丈を承

光とふ承光始成井郡大少佐、後豊長為吉と小姓を有  
仰見の成を嘗ニ志ア監院支光禪云は被毛从子のあす  
波多の枝主久く妙馬をもく拂ト又其子顧と名て  
寄り主とゆ丹毛主とゆむと西行跡至德不拘て是ハ  
宮ノ一毛承法又子の幼られ一存跡修理庵と号ス  
東福寺は法堂を後慶の堂の株板山僧明水より移  
有兩人よまと換以ム承徳至テ是を承徳ノレヒ承徳  
寺を蓋ていきこ故と奉支一て病ありイと危之取ノ因

岩樹是年補一中後以天王寺至奥後一光大寺にて聖  
徳ち子め縁起止也の壁上画一む考吉龜と字と云々と  
書記と付、経版の城下町に城端て落思寂主也く

栗照神君を號ゆ山并に後落ゆ小姓一髮を剃て山樂  
と号ひ是寛永十二年八月十五日卒は行年七十七

一 此村名和大師利貞

栗田郡牧野の入ア禪

一名は平之久被度幕北朝文武奉行也伊賀山岩牛の城主也

とある

一 伊於清若傳有利

出自彦馬元ウサギノ山海經の男

士トモトモ草切かとありて晦日次義濃の國も坂れ

新小鏡記

一 細江河内守秀時 岐井郡細江村の庄士浅舟の  
勇士也

一大橋安政牛馬元 嵐山の勇士にて名次第と号す  
一 宮浦善洋房 坂田郡碇井の人也姓浦美平清能  
初め巣山西塔のやり發生する泣山を下りて武主として  
鳴り豈にあらかじけん中勢源法師にて但馬の靈巌  
園の塔主也屢々切のを以て因情伯耆を以て  
一 慶右衛門も直純 堀津の庄主その先桓武天皇小  
野天皇の皇子曾源親王高源上院公高望王孫て平

竹所を知る高望至代の末山路を走る源平沿革 東考  
ち子立方義俊のれ高野川と立子川と武彦の子  
義家と流すが立子川の源高美三栗の初子也。をもくね  
おの山はもと忠臣の弟席蓮生法師也嫡子立方義定然  
若き頃から忠臣とよぶをより源平沿革立家との子平次  
立ね候て高國守降を経て是より後、近の同士位  
支せしを近の慈家とよぶ立家も源義仲も立花  
義政將軍と仰ぐ慈仁の乱の本政要簡編を若述  
人義政を徳む義政深をしまく布て追放により下も  
彼復ふよ書して書く其待ト曰是故也许多年出家

鷹的是安佐守日安恩入封境從赤木端來而信  
ふとももへやうひとひよ向しの處の荒の馬うきを  
陵重化京極家の技術を盡す

一 吉田上野公重賢 侍東の家總なれ給ひを帝と  
号後村術を承り曰生潭正正以小後て神妙を染み  
不弓術の祖也片尾家家道小い蒲生殿ゆ来村の士と記す  
是後村術の妙率夷称義以侍東吉田家を支義賢甚  
射傳主相續也今之謂は重政許さる高木義賢と  
除り了達ノ、家地をまとめて越前ノ國一條若小居奉年

六年近江小袖を義賢宋邑七ヶ所を加信ト、遂に村道  
此一費を差實ヘ、さほくひそだりて一鷹を與

一 滝川左近將歸一益 甲賀郡大原村の人也伴大納言  
善房十四代付後胤伴囂備健伎貢兼三世高永助六郎後  
寔後胤也後寔善安三年四月南國甲賀郡大原村不  
覺居セトドリ子孫富國、弟一光を伴の堂と云  
益々鉄砲の達人也織田信光少侍山信長領、登庸  
て長後之後天正十年園東の復領代ト、上列既得  
此城を丹波後伊豫籠江の城尾渡の西面長瀬村城山  
通常久信長薨て後後半中納言秀信紫田信忠

勝家山等一十九方と我路不義也

一 山田道川源 景行天皇の皇子武持高林大伴の姓を

初望呼て大辰と便矣其後胤高志の末也高田甲斐小首

之伴は堂主と云道河跡ハ山田源を良京法亲子山墓中

勢無東征入道玉林父之子なりとし故名あると号す佐

之向付也又ハ佐ノ信ニ井手の左角尾の佐鐵也ナリ

置度と号すと號く還信とて少帝在焉多不くシ

佐中守と仕へ織田信長秀吉及 東照神君佐

日氏主と改宗は、子新空印多也と號く有らふと云

跨美濃石坂一族と食邑主方ろと仰上度也九年甲辰

五月初日辛亥行年三十又九

山田義修と並隆

對馬守景祐の足り

一 佐那加義修

祖父と佐那監物と云又と助之と云

つし後ノ歴政功位至藤山の名ノアキ能多と云うナ

アナナシ又アカヒト以テ助之助也と云は御庵と云

或云ゆりとも一作木彦也も小屋也の人ノ中村武助

一氏ノ子也と云々小田原山内ノ陽少一房也と云て云

後豊田右衛門尉を鹽井使一万石と云一太和山の代

之より周千石の乱後移山ノ移と云既歴有田町切立

主脇義修の役處を充て居三井一井乃阿豐房延の孫也

をさへ一役置とがくくまゝ、浅井がよく勤き事、即一さ  
りもあ)

一 岩尾義作の活綱 初の名孫と申す浅井が海兩幸三傑  
の一人と織田信長の為に後北条と又と岩尾源行守  
者也と云。浅井高野の父也。初とも岩尾源二郎とし  
後岩尾のぼと。義作と

一 三田村定元 岩井門友と號す代々安極家の薦りを  
うのみを國主と云定元。又是ひと浅井久政。二男。  
三田村の家り五代と云。歴々主上坂の御子と号ひ  
統ノ後よりもと三代つる又よも三と寧切隠匿を

國定後信也(院)劉了。

一大野木土佐守秀國 大野木利八守(院)と云。浅井

貞政。四男。秀國。あと秀俊。と云。

一小倉内蔵右衛門資久 裕と云河。と云。と雲助。と云。

今川氏直と申十八人衆の隊もと。十八年つとて承保

三年小畠之介加勢と。今川義の陽子義教ア武功也。

一 岩破豊三郎時家 岩松氏と足利將軍義昭のあ子。

朽木宮内太輔貞経 貞経。あと河内守元忠。と云。

一 青木加賀守源直 今川義元折。と。源平。惟守。と

守直刑部少卿。源憲。と。号と民野り物。一面。又と。帰川翁義

主教十郎左衛と討つ。

一 嵐原左馬允昌監

四ツ城主もも

海北善左衛貞兼 浅井ふみの海雨ふみの三條と移る  
え酒一升

福井丹波の直政

高野郡の主大尉の才と佐和山の  
守とおはなに繁平左衛支直詮、おれと

福井源吉と負

福平左衛主直詮とよはらの精

射く

伊庭義重 蒲生御伊庭の主を大力量の人也

一 蒲生俊賢 蒲生加日野の人田原秀郷七代の孫くそと  
惟俊と云多利と云化山あると云う俊賢、源彩野と  
作る蒲生氏の元祖も

佐多經房

佐多永義経(アラク)成村、猪(アリ)そ

乃木永ノ松の神官と云う常に佐多の小姓猪(アリ)住

万木惟綱

山城志都左衛門と号す佐多彦綱(アリ)

兼(アリ)三年官軍、ちつと族を殺すと計る万木氏の

祖も

鎧少佐左衛門定重

近江守(アリ)佐多本彦(アリ)

元山内多喜の子也

佐多本彦(アリ)

高房高信

左馬門尉高房氏の祖。仍家信親子。

朽木義綱

左馬門尉出羽守。仍家頼親子。朽木氏乃  
祖也。

青地基綱

四郎。うち青地ノ祖也。

勢田判官為兼。出自源氏。安貞年中は坂戸天皇

乃御ノ御内ノ大將也。車上。勢田判官為兼。乃御

く左國守。佛傳記の記。勢田文利。大利。中原章

村傳承とつとめ。勢田文利。大利。中原章

記。又大國記。出。

甲賀入道成覚

寺承氏。本曾義仲。信。之。孫也。

下ノ忠功子。

大河原長門守。出自自利。足利源氏。出。甲賀二十一家

乃祖也。

黒川久内

夏秀之の孫。甲賀。足利家内也。

平子主殿助

甲賀。五十。子。

頃宮四方助

甲賀。二十九。の孫。之。頃。の。子。有。武。切。之。

山中丹波秀國

佐多本是。元。子。山中。八。節。定。れ。子。

お猪。之。沟。陣。ハ。山。中。十。郎。武。切。ト。一。感。收。り。甲。賀。

二十一。の。孫。之。山。中。宮。九。少。佛。宣。成。秀。五。之。秀。五。

子。山。城。之。秀。五。之。子。之。秀。五。

一  
多羅尾四郎多衛定武

六角の武道うけはれ

とふ定武ととれども多羅尾の多羅尾久八郎しげて族

をすおじよ多羅尾の多羅尾久八郎しげて族

高難尾道可 四郎麿

増上寺音公

増上寺の二せう)薦圓甲多(ひく)月  
外記(うき)宝徳元年八月(ひがつ)田道満(たみ  
ちく)拿(な)一日(いちにち)て白(しら)者(もの)天地(てんじ)傳(つら)渴(うが)色(いろ)嫌(めぐら)

伸利臺(のりだい)三悪(さんあく)火丸(ひまる)阿鼻底(おばそこ)一(いつ)様(よう)不(ふ)轉(てん)

古(こ)今(いま)更(かわ)大(おお)宅(たく)ハ  
テ(と)や(や)小(こ)車(くるま)のよ(よ)

窟(くつ)と(と)よ(よ)れ(れ)大(おお)年(とし)に(に)あ(あ)く(く)と(と)云(い)人(ひと)口(くち)

採用(さいゆう)

田中多郎大神吉政

甚(じん)天武天皇(あそ)御(ご)天武(あそ)の皇

子(こ)と(と)高(たか)市(いち)皇子(ひめ)と(と)天(あそ)代(しろ)と(と)草(くさ)傍(そば)と(と)よ(よ)義(ぎ)花(はな)

天(あそ)の師(し)と(と)高(たか)市(いち)と(と)天(あそ)代(しろ)と(と)草(くさ)傍(そば)と(と)よ(よ)義(ぎ)花(はな)

範(はん)と(と)高(たか)市(いち)と(と)田(た)中(なか)十(じゆ)郎(ろう)惟(い)業(ぎょう)と(と)後(ご)有(あ)る村(むら)と(と)多(た)

田(た)中(なか)と(と)多(た)と(と)多(た)田(た)中(なか)と(と)多(た)と(と)多(た)田(た)中(なか)と(と)多(た)と(と)多(た)田(た)中(なか)

と(と)多(た)と(と)多(た)と(と)多(た)田(た)中(なか)と(と)多(た)と(と)多(た)田(た)中(なか)と(と)多(た)と(と)多(た)田(た)中(なか)

と(と)多(た)と(と)多(た)と(と)多(た)田(た)中(なか)と(と)多(た)と(と)多(た)田(た)中(なか)と(と)多(た)と(と)多(た)田(た)中(なか)

秀吉を馬に仕て一住色の長の下と侍り、もはくもの後  
吉の名のあをゆを仰アモヒトをめぐらし、とくに加賀四万  
石をうりて日向西尾へ移る。之は太神君と軍功うりて  
能後一國と并以てキニ方石の領主。同十四年有春日  
か年には戸を祥子と號武を勢切に構え、後之の  
事原田中伯耆久安弘(みちひろ)と云はせられん。  
一  
堺遠江守政一 廣井御 少翁有の彦也。初ノ彰命  
号也。 東照神君と仕はず。上方守代左近侍級代と  
兼役。是をほしはき方石と仰ア付近の年引も多  
矣。

片桐東市正旦元

初名・物作・萬盈佐・木の腰元

片相強ひ直貞の如く娘の歎七を経て活アリ伍謹  
寔光伍中也。実方若狭ち寔内等、義政將軍義尚  
將軍位上國元、之族ナリヨウ也

一 増田右衛門尉長盛 俊井伊部守田村の彦三と初めに駕  
と名ト御城久と豊臣秀吉もは天下の力主行シム  
十三万石と以て國名取以ては奥利少紀流も子多良  
盛直發はの後多良と大坂方加江戸代官として多良を置  
莫列、於テ自創ト

一 木田吉三守搞求政 志賀郡伍長と彦三の名も  
貞純別號にて昌慶ともいひ將軍足利義輝とは

吉義昭(竹)義昭朝臣乃勘定としけ細川ガツノ痛着考  
ニ屬し、永政(ヨシヒコ)の細川出荷の臣少(ミサ)、中川足利(アリ)  
は(アリ)細川(アリ)昂(アキラ)と木功(ムコウ)のあ(アリ)、醫(アリ)  
少(アリ)、永政(アリ)と木田監物(ムタマツル)、張列(アリ)経(アリ)はの  
後(アリ)、箭(アリ)て大坂(アリ)の將(アリ)大坂彦(アリ)傳(アリ)の後(アリ)、  
経(アリ)本(アリ)西(アリ)教(アリ)事(アリ)、又(アリ)ユ(アリ)年(アリ)富(アリ)、肥(アリ)て細川(アリ)  
属(アリ)て子(アリ)源(アリ)左(アリ)虎(アリ)て細川(アリ)も(アリ)う(アリ)、木田出(アリ)自(アリ)解(アリ)、  
え(アリ)と(アリ)大(アリ)和(アリ)敷(アリ)省(アリ)事(アリ)、又(アリ)承(アリ)、又(アリ)細(アリ)お(アリ)て篤(アリ)  
武臣(アリ)も(アリ)國監物(アリ)は(アリ)秀(アリ)と(アリ)す(アリ)の事(アリ)と(アリ)是(アリ)

一 村守吉成　國白秀以の老臣木村多隆公より  
秀以高野にて生害の内弟信公と源少弐等を放逐自  
殺を弟信公を安成と姓へ高國の國下に隠退  
されて左角公の子と是と云ひて居移り至成勝明にて  
軍馬の通う所十所以上といはれ候るは大坂の落  
セ方石等を支給とるやう又宣成、東照神君清  
きの體すと後年取て宣錄らしく今に於く義談  
大坂の軍惠木村真田後裔長曾我公左衛門天王  
移り真田信重を若狭守となり老功は年一人之

重成例三十一年、  
終井伊掃部頭小姓安彦長三郎、  
主内相手者人として左角寧相義綱と義政相見そし  
て左角アラク左角公又軍相義綱と二人而

一 石田治部少輔三成

高國波井公右衛門の養子と义と義  
主公加く大國秀吉とは従弟と云ふと  
立派の陽子連の大國亮ては幼主秀賴被て乳と  
起一國而波井の大名及び國下母顧の群臣と伴  
義濃國実多羅郡上原めぬことを成らるる京

卷之三

本村専門守達成

周白秀の老臣本村多良久、又より

秀次を即して生害の内幕清久と沙汰が争ひて自  
身を帝傍へ委重成と號して高國の國下り陣を  
引ひて左角弓の上に是と並び一馬を主従腰明にて  
軍馬の道を走り十騎づゝそひ合ひはるに後大佐を落  
セ方石等)を破りとあやし)又宣成、 東照神君渴  
きの醫と詔奉、 我に宣詔ありつゝ今ノ於く義談  
より大坂乃軍、 惠木村貞吉、 田後藤長曾我助、 久四天王、  
能川真田信重、 お我部、 おとねハ成り老功は年少之人

石田治部萬蒲三成

石田治部萬三成 南國波伊江西村の義子、又義  
重門政成と上後多竹中無盛高記、乃歴、乃々  
至ひま加く大國秀吉は徳儀(アラフ)とテ、進く  
且事の陽子連(アラハ)大國亮一(アラハ)は幼主秀賴枝下乳  
起一國而波伊江大名乃ひ屬下母顧の群臣と偕一  
義濃國室多守少郎、上國めぬこそと成らるハ尼京

宗成ノシテ家忠リ記、慶ちユ年庚子九月廿三日ニ成  
捕捕ノ大津乃レ鷹狩彼、敵トニ成國ノ原の敵傷と  
直ル者ノ以小草野ノ奥照坂より降りて右ノ御室を  
着、草野瀬と推、破失ト以彰と追、摺丈ノ要  
みテノ後を而、御室ノ左近トアタマノ田中、御部、高井  
政約命とよく召被、ノ又多め求めに昇下傳左衛  
中二尺守の利刀を摺、ト、もと小豆、栗田、御草  
野、青島、野、佐野、野、松川、東照神君、青島、  
伊藤波、久、前と成と摺、きさくは摺、きさくは御忠リ記

義博」と云ふとあやうく、詳ノ如ヒ  
一足立新之節清恒、近江冠者と号し、源賴朝の臣  
あとは平治初治、速々元年、有七日都合のとき、南国  
を移して始て村朝ノ仕となり、御、東濃盛  
喜記平治物語等とある。春水元厚文は、  
村朝は、速々元年、賴朝ノ子を遣し、と云ふ事  
が於て今、

一釋迦祥、野例即の今、却て護命は師と仰  
至天安七年春太極殿で、最傍主座と稱え、湯屋移  
多々起祥、金碑辨を以て官僚移徒

伏草とて子年か  
仁寿元年僧<sup>正</sup>住一三年九月辛未

年ノナカ

一  
釋氏訓姓錦氏医賀神のく卑く玄暉法師乃  
徒と考へ近廢年中興宣之戒と文と仁寿二年僧正  
トシテ荷衡二年九月辛未年八十二

一  
豪堂和泉ちあら房  
多賀神職の修院ちうと文と  
源入虎ちとあ豪堂九郎在政セトモあら房姓の名  
与有舊ほ佐渡もと号一和泉守とありゆめり豪堂秀吉  
在也一但馬國一揆乱の貢焉く切りて秀吉とあらと  
崇多々於く武名四方より秀忠卒後高野山小

往く蘿蔓深衣乃身くわたり豊臣秀吉と英ヤ勇  
謀とやレ一傍く還俗せしも後秀吉と住<sup>シ</sup>船の  
軍刃房武<sup>シテ</sup>風<sup>シテ</sup>大神君天下一統の慶高  
弟 大神君とぞうて諸將ノ妻とひくに生  
高弟と我妻と併の江戸に實<sup>シ</sup>もく諸侯  
陽かくの如一是<sup>シ</sup>全く高弟胸<sup>シ</sup>の善計<sup>シ</sup>文錦軍  
胄<sup>シテ</sup>大内率<sup>シテ</sup>高弟初丹羽秀吉と清<sup>シテ</sup>くをりす  
大内秀吉自のよ<sup>シ</sup>もくちもく高弟<sup>シテ</sup>養堂富  
士楠<sup>シテ</sup>名古屋<sup>シテ</sup>高名<sup>シテ</sup>は伊豆<sup>シテ</sup>是<sup>シテ</sup>切り<sup>シテ</sup>臣<sup>シテ</sup>御  
父寒川名方兵<sup>シテ</sup>是<sup>シテ</sup>西尾<sup>シテ</sup>因<sup>シテ</sup>監<sup>シテ</sup>高名<sup>シテ</sup>の臣<sup>シテ</sup>て武

功あり 大神君一族のほたちを秀吉の子弟とす  
益堂も少とお縁する奉りて、まことに上高弟也 実  
ふも生せし」とほくもむこと所寄へて今高君ノ子  
孫伊賀の國名後ふるく益堂がひくに屬ひ益堂家  
ヒキく是をほくせん史益堂の姓移し南園衣笠姓  
士官宿の益本らと而も出で奉り大上郡の陣下に歩き  
一 中村式部大輔一氏 山房、元房、又と中村昌平一  
政と云一氏初えらび大同秀吉と仕へ難御年 箸年  
小田原の役とす初を大將とし後源氏の旗軍の傳て  
居し中多賀守りあてりて一氏ノ子一子の園左衛門役軍

一切を以て松平氏及秀忠云つまこと物と忠て号を伯耆  
美濃乃リ傳てとがは後むすび於此施因彦君篤一官  
孟源河内國守多村と摺居と

一 長束大義其輔正家

栗田給事多村の彦子と姑丹羽忠秀

三住(後秀忠)はアカガラと以て水口と威主と称す  
秀吉云々まわの主一人也生貿利根柳明にて篆術の妙  
至得論議多はせば朝鮮陣ノトノル正家一人と  
無異多般かず奉りて厚すしも石田之成の洋とと  
一秀吉の傳を承りて、他因縁故、秀吉をあざむ

一 吉田仰西

若田原八郎臣至氏席生益島色村

今之始り高家は源氏の吉田出雲守を恩嫡女と  
以て源氏郎山城を後廢帝と至る。高麗一水引  
印西と吉田信重、董辰彦等は吉田氏の姓。一水引  
城中納言秀康の多い室相忠昌に、源氏主御とひく  
東照神君 台徳大君 大猷大君と并んで有る。寛永十  
九年八月三日卒。享年七十。享年諸國鳥人三十  
世子を印西流とし、嫡男名馬公を信、次孫泰慶也  
行範奉より。官信尹と年因と入を好くす。

木村寿徳 姓も猪羽氏志賀郡堅田の人。耐術と吉田

生をも重陽とよぶ猪羽アノミアミと考ふる事  
世く是を寿徳流と云

一針脚加賀守 日暮御がうら武蔵小傳と針望吉田  
上雲公と号く。日暮洋正と行し猪羽とほん。江列伊吹  
山の村居あると云吉田印西流の事。吉田防寧中アモ  
自免乞と行望加賀アノ傳承とも有ア

一 松本民部蘿 吉田道ウキ季の子アノ大津松本店  
移射アノ後越前守成アノ義元也

一 吉田左方源門重勝 吉田一説入防の子アノ射利重  
弓の材と云ふと今サレ。僕作と云は雪原くも

今射鳥者隨處有之是也

一 吉田左近右衛門業茂 高山をもまゐる男射術の妙

とひきうる今右也在る地と云ふと是く

一 吉田大藏茂氏 右也右衛門業茂三男 射術の勝妙  
至降うる蓬莱玉院と射手本十度にてち度至と

而後今大藏源と云是乃源うる

一 石堂祐林知成 始僧より竹林傍より古高一郎乃射  
術の傳と云ふとゆき移射うる号を彰シ常後  
石堂竹林とよちうる今竹林源と云ふは也源うる

一 裕 賴真 も知弘の人九景にて全徳寺へ至

比丘の法尼としてしなみ不被悟して洞涌と號て文義と  
辟と精進列責お漏益勤うる年七十方少と漏入  
釋相應 俊升紹の人櫛氏と毎日と呑と食と生じ  
年十みとて廬山小室り慈惠大師卒てあると是  
徳りて乞動手とすと卒うるが年八十也

一 裕光空 金勝寺と云うとは原を漏入澄不勞と  
著賢の冥助と慕う一年のやうに東國を傳傳うる

一 宗伯 三雲氏の子と云ふと宗嗣ちうと云ふ宗伯正養て  
ゆく雲と云ふと後圓方の齋一宿と云ふ方脈をまひむる

御事一是ナリアヨ／＼もと軒政の御事筋

東照神君ナリエニリふ采地とゆし施薬院侍は早

ニ叙一頃子の名と號と著よりての書を撮要集十巻ナリ

中江雪右衛惟命

ち候御前村の人也サキミテ

高と清く顯聲明するも之を主と油安を掌す

李朝諸王の主事惟命是と渴々毎日ノ如キ

ナリ伊豫の國大洲ノ城主加藤氏代一母と向く能む

シテ母の曰婦人を疆を越えシテ故くハ我ニシ

カシテ惟命洋ノ録を辞り郷里より母乃

チテ母の著述ノ事多キ

慶安元戌年の年宵二

十九日卒ト仰年四十一号名ハ原字より惟命歟勅と  
号す宅の裏内差樹ノ名と以て門人差樹先生と謹を  
今小字宅於く毎月六日書を講じ

一  
五十川了菴 譯を春昌とメタと申名と云後春意

ナリシテ多源氏仇ノホノ族ノ五十川村也ノ因て  
氏より祖を伊鑑と云伊鑑人を嗣一道ノ京都求て  
四傳切ツメ位に伊鑑子可仕メテ了菴ハ了仕方三乃  
子八弟子ノ盛方院紹繼と云ひ號易術と名ナリ  
また大齋通ニテラク唐也七年壬寅了菴始々太平  
記を極行ノ世俗不復見本  
幕府ニ有

東照神君了菴少爺——新小東謨を附——し序——

宦本より

一 北村季吟 出自詳り、北村益兵氏、北村宗之郎室移  
シ、みあり又と右房門正元と上祖又家龍と北村紹巴の  
門下にて連続小名なり。毛利元康に付、季吟と北  
名も北村之助後、慮菴と号す。再昌院法印と宝永  
二年六月十六日卒。死後年八十、歿後三十日季  
吟往詣、有る所の奇キモ高キイ母が蓋あり。

以上當國の人物より、當國の彦子、水土の彦子、三人正  
毛一介へ況義國のひとも、説家武功戮切の士あけく  
り多くある。

翠葉の下にと急まくとちるまくとぞ、千叶一持  
えん。つづくと、峰うへ人々と、騰多やるのと  
らうはて、當國の勇武ア、男氣とぞ、上吉つ本、  
り多くある。

一 紅源兩家 ヤク多源氏、佐多家、西氏、うつて、北角  
京極乃二流、うつて、安井川を異とし、にあを佐多家、  
角と云ひ也と云ふ。京極と云ふ。

一 南家義賢、乃ひテナ義治も、二十三世、  
南家義賢、乃ひテナ義治も、二十三世、

風流あり。

一 京極直口守氏信 子孫多 伊吹上平より左博にて嘉

長門守高秀之子也とす

一 佐多木七郎 目加田 馬闇 伊庭 三井 三上 合

他田也

一 仁原西門客 高橋義綱 丹波美綱 田中四郎尊房 賴良之

六角義貞ち宿老

後裔但馬弓秀房

後裔山城守貞治

日加田持康ち綱清

蒲生義房大室豊秀

雲部源兵の成持

牛井加賀弓宗氏

一 俊井三代

俊井備充亮政

左内  
俊井信房之長政

一 俊井四翼

福跡丹波弓真正

大野木志房之國重

俊井三勇士

海北善石弓貞兼

元庵安修弓清綱

一 甲賀二十一家 北山力家 山中家 兼内家

柳本之助弓毛を甲賀二十一家之一とす

一 北山九家

大名源氏

大河内氏

高氏

北山九家

源氏

土山氏

北山九家

源氏

源氏

北山九家

源氏

源氏

神保氏

源氏

源氏

南山七家

原氏

源氏

大原氏

源氏

源氏

上野氏

源氏

源氏

北山九家

源氏

源氏

俺氏

源氏

源氏

左内三家

源氏

源氏

鶴飼氏

源氏

源氏

内貴氏

源氏

源氏

柏木三家

源氏

源氏

伴氏

源氏

源氏

義濃部氏

源氏

源氏

甲賀十三家

源氏

源氏

高師氏

源氏

源氏

譽庭氏

源氏

源氏

倉智氏

源氏

八田氏

芦原氏

大庭氏

三雲氏

多居氏

宇田氏

上山氏

佐吉氏

官鳴氏

中山氏

松村氏

邑野氏

糸姫氏

儀俄氏

山上氏

喜良氏

高木氏

師田氏

大山氏

上田氏

平子氏

黒川氏

高山氏

岩根氏

ともは、甲賀乃、ユキニシテ、移シテ、本ヒ代、佐奈  
郡ニ付、ノ忠助、アムアム、アム

輿地志畧卷之九十六終

